

Title	日本吉利支丹宗門史(第四回)
Sub Title	
Author	Pages, Leon(Yoshida, Kogoro) 吉田, 小五郎
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.1 (1932. 3) ,p.115- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本吉利支丹宗門史

(第四回)

吉田小五郎 譯
レオン・パジエス著

第七章 一六〇五年(慶長十年)(註二)

公方様世子秀忠を國事に參與せしむ—公方様秀頼を大阪より出さんとす—恐しき颶風—神父ヨーム・コツタ或はポルチコの死—内府様がヒリッピンの太守への大使—一般教勢—長崎の教會の頭となれる日本人—耶穌會の一神父が公方様及び世子訪問—江戸に於けるアダムスその他若干のオランダ人—諸國に關する細説—奇怪なる事件、幼兒蘇生す—囚人たる慈悲役等の苦惱彼等の徳行—毛利殿山口にて迫害を行ふ—ベルシオール豊前殿と盲人ダミヤンの殉教—舊の豐後侯義統並にドーナ・マキゼンスの死—京都—神父スピノラ・ジウリウ・ピアノ、バルタザール・ロペス兩神父の死—オランダ東印度會社

諸大名並に庶民は、斷呼たる行動が期待せられてゐたとはいへ、未だ公方様の政治に就ては不安を抱いてゐた。この年公方様は疑團を總て晴し、自分だけ帝國を僭奪する事に満足せず、家族の中に之を永遠に傳へたき意のある所を示した。彼は嘗て太閤様より拜領した自領關東の諸國より次男なる若年の世子秀忠を呼び寄せた。彼はこの秀忠を世

子として後繼者として選び、秀忠の爲に最近上記の諸國を讓つてあつたのである。彼は秀忠が後をついだ事を確保する爲に、將軍(Chogoun)即ち公方の稱號を執らせること、決めて居たのであつた。秀忠は七萬の兵を率ゐて父の根據地伏見に來り、次いで數日の後、内府様は、内裏(Dairi)より將軍の稱號を拜領させる爲、彼を京都に遣はした。此時豪奢なる酒宴が張られた。(註二) 諸人は、彼が宣下を受ける爲、關東から京都に上つた折、往時の將軍賴朝(Yoritomo)の道中のあの盛儀を復活する事を望んでゐたのであつた。(註三) 同時に公方様は、秀忠を大阪の外に引出さうと努力した。彼は、此若君に義父に當る新將軍の許に來り、訪問するやう勧めた。併し秀頼の母なる政所様(Mandocorosama)は、其危險を豫見してわが子の往訪を思ひ止まらせた。彼女は其ことはりを述べ、種々談合の末、城を出る位なら子供と一緒に切腹するといふに至つた。公方様は、大いに怒つたが、敢て暴力に訴へようとはしなかつた。一方主君秀頼の勢力は、其後頓に弱つてゐた。併し、彼の父は、信長の相續人に對して同じ振舞に出たのであつて、今や彼自身

が當然な罰を受けた譯である。

新將軍は、平生餘り氣前のよくなかつた父と事變つて諸大名に大した贈物をした。間もなく彼は關東に歸り、一方儀式の爲に來て居つた諸大名は、各々其領國に歸つた。こゝに於て注目せらるゝ事は、諸大名の中一人として、年長なる公方様から何か刑罰を受けぬやうに、秀頼に御氣嫌奉伺に行かなかつたといふ事である。

此年恐しい颶風が帝國を吹きまくつた。キリスト徒は五十の會堂が倒壊した事を悲まねばならなかつた。なほ之等の建物が、ヨーロッパに於けるやうな廣大なものでなく、又費用も僅かしかかゝつてゐなかつたにしても、尙且つ非常な損失であつた。此間に支那の船が無事に長崎に到着した。併し其他多數の船が沈没し、耶蘇會の一神父ギヨーム・コツタ（若しくはポルチコ）(P. Guillaume Cotta ou Portico)は、其中の一人であつて、八月二十七日（慶長十年七月十四日^(註四)）に歿した。

エスペニヤ人の商業は、坊主共の中傷があつたにも拘はらず、關西の諸港とフィリッピン諸島との間には、依然繼續せられてゐた。かの坊主共は、宣教師が帝國に入り込むこと、並に、多數の日本人がフィリッピンに滯留し、而も其大多數がキリストの教を奉じてゐる事に就き極力疑をかけさせようと努めてゐた。然るに、同じく此年、内府様は新大使をマニラに派遣した。フランシスコ會の宣教師等

は、愈々多數の船が、内府様の諸港に入るであらうといふ期待を持たせた。併しエスペニヤ人は、其名を以て約束したことを持たせた。併しエスペニヤ人は、其名を以て約束したことを持たせた。英人アダムスは、主君の不満に油をそゝいだ。然る所、主君は副王^(註五)に約束の履行を求める所欲し、太守より贈物を受けた其返しとして、立派な贈物武器を持たせて重臣の一人を遣はした。彼は總ての物、就中贈物の中にあつた葡萄酒に對する禮を述べ、船の數が増されないで減ぜられてゐることに就き注意を促し、マニラ在留の日本人を再び日本に歸さぬやうにと依頼した。（恐らくキリストになつた者を指すのであらう。）蓋し其書翰は鄭重のものであつた。太守は通商の事並に君主の論件に關して同じく慎重に返答した。主君は満足げな様子であつた。

其頃、日本にはマカオと支那の内地にゐた日本の教區に屬する者を除いて、百二十一人の耶蘇會士があつた。日本の宣教師等は分れて、二箇所の學林、同じく二箇所の中央の傳道所、一箇所の修業所、及び二十三箇所の駐在所に分れてゐた。

フランシスコ會、ドミニコ會、並にアウガスチン會の宣教師等は益々多くなり、其事業を擴張して行つた。

日本には其頃七十五萬人のキリストがゐた。此年、新に洗禮を受けた者は、五千五百人あつて、長崎だけで千二百人以上あつた。新に改宗した者の中には、富裕な商人と

可成多數の武家があつた。

多數の諸侯が堂々と好意を寄せてゐた。三箇國の主たり

し肥前殿、安藝及び備後を領し廣島に都せし福島ファヤド

ノ

(Foucouchima Fay)

長岡越中殿、博多に都せし筑前殿カミ

ドノ

(Chicougendono Comid)

ono 黒田筑前守長政

dono 田中

) の如き之であつた。内府様の寵臣にして京都の

所司代板倉殿 (Iacourandono) 及び上野殿 (Consoukedono 本板倉勝重) も亦宣教師に力をかす事を憚らなかつた爲、其庇護に依り、キリストの教は首府の中ですら安全であつた。

人々は京都に、往時のよりずつと美しい會堂を新に建立した。公方様常住の地たる伏見にても、人々は同じく會堂と住宅とを建てた。

長崎の町は瞬く間に擴大し、住民は擧げてキリストで、又世俗の富を求めて來た異教徒たる町内の多數の商人共は、金銀なしに贋ひ合ふ精神生活者に出会して、物質的にも精神的にも富裕なる彼等の祖國に歸つて行つた。長崎は司教が常住の地で、耶蘇會の主要なる學林と大きな傳道所があつた。司教の授品を受けた最初の日本人は、最も廣大にして町の人の出入の多い聖母の會堂 (La Madone) の主任司祭に擧げられた。

一六〇五年、初めて盛大な聖體行列が行はれた。信者の熱心は、驚く可き程で、聖體の祕蹟に與つたことを第二の

洗禮と考へてゐた。宣教師等は注意して彼等に十分此恩寵を得させるやうにした。

此慰安の最中、種々の波瀾が起つた。長門と周防の主にして山口に都せる毛利殿が宣教師を追放し、キリストに迫害を加へた。彼は著名なる大名ベルシオール豊前殿 (熊谷)、及び熱心なる問答師なる盲人ダミヤンの首を刎ねた。肥後の元主計殿も亦、迫害を始め、三人の慈悲役、即ち其領内のキリストの柱石たりし問答師を投獄した。

當時内府様は、其世子と共に江戸にあつた時、此首府にゐるキリストの數は仲々多いと彼に告げて來る者があつた。其處で、彼は其信者の名を登録することを命じた。極く僅かしか信者は見當らず、爲に君主は安心した。

若干のエスペニヤ人が無謀な陳述をした。幾艘かの船が新エスペニヤからフィリッピンに來たが、其積荷は何であるかと人がエスペニヤ人に質ねた、すると彼等は愚な虚榮から、モルッカを占領する爲に、兵隊と彈薬とを積み全艦隊を率ゐて來たのだと答へた。此征服の決心がつくに至つたのは、全く正當な動機から出たものであつて、侵略的の精神から出でたものではなく、同年中に實行された。公方様は此陳述を聞いて激怒し、立ち所にエスペニヤ人を全部國外に追放しようとした。同時に彼は江戸のフランスコ會の宣教師を數名の大名に領けることにした。

此年クレメント八世 (Clément VIII) の親書が日本にと

どいた。それは日本に行きて傳道せんと欲する宣教師並に
俗説教師は總て道を東印度にとつていゝのであるが、他方
西印度を通つて行つてはならぬ、而して若し誰か此道を通
つてフィリッピンに入つたならば、必ず破門 *Iatice sententiae*
を受けてフィリッピンの外に出なければならぬといふこ
とを規定したものであつた。此親書が日本に來り發表され
(註)ると、耶蘇會の神父等は、他の教團の宣教師に教皇の親書
に見えたる規定に従つて、直ちに退去するやう懇願した。
然るに之等の宣教師は、之に對して次の如く答へた。先年
マニラの大司教神父ドン・ミゲル・ベナビデス(P. D. Mig-
uel Benavides)に親書が下つた、其處で諸教團では嘆願書
を出して、此報道の不可を證したのであつた。即ち宣教師
をして是非にも東印度を通過せしめるといふことは、宣教
師等の日本への通路を全く塞ぐものであつて、之れは教皇
の希望せざる所である事、日本に傳道事業をした宣教師が
東印度(○西印度といふの誤ならん)を通つて來たといふ唯それだけの事
實によつて日本から追放される譯には行かないといふ事、
マニラの大司教が例の請願を受けて、之に就いて教皇に照
會し、事實を有の儘にしておいた、故に問題は教皇に引き
渡されてあるから、誰も宣教師に苦情を云ふ事も出來ず、
又苦情を云ふ可きものでもなかつた、何となればマニラの
公廷の請願に關し、大司教の行つた停止と照會とは宗規と
民法とに合致してゐたからである。故にドミニコ會其他の

教團の宣教師等は耶蘇會の神父の反対があつたにも拘はらず、依然止まり、而してエスパニヤ王に依つて請願され、一六〇八年(○慶長十三年)教皇パウロ五世より得たドミニコ會其他の宣教の爲に、有利な抵觸を見る事になる。

ドミニコ會の修院長神父デ・モラレス (P. de Morales) は、トマス・デュ・サン・エスピリ (Thomas du Saint Esprit) アロンソ・デ・メーナ (Alonso de Mena) の兩神父を別々に、他の諸國殊に大村に傳道の爲遣はした。大村の大名は、耶蘇會の神父等との交を斷ち、其若干を投獄し、同時に此大村の教會のキリストンの多くの者が恐怖の爲に棄教した。從つて或者は其信仰を堅くせんが爲、さしづめ宣教師の必要があつた。全くよくない張本人は、ローマで叙品された日本人の宣教師(トマの事)で、彼は日本に歸つて棄教し、教會に對し猛烈な戰を始めた。神父トマスと其伴侶は、耶蘇會の神父四人を其獄に訪問し、キリストンには精神的慰安を與へるに餘念がなかつた。彼等は同所より更に平戸に渡つた。平戸の大名は、宗教に對しては大いに敵意をもつて居り、同地の信者は宣教師の援助を望む事甚だ切なるものがあつた。

京泊 (Kiyodomari) の港に根據を据えてゐたドミニコ會では、ノートル・ダーム・デ・ロザリヨに奉獻して建てられた其會堂が仲々榮えて居つた。

豊後に於ては、臼杵 (Ousouki) のキリストンを世話し、

同地に一修道院を建てたアウガスチン會の神父ペドロ・デ・オロッコは、一六〇五年四月二十日（○慶長十年三月三日）マニラで開かれた管區長會議で修道院長に任命された。此年、神父エル NAND・デ・サン・ジョセフ (P. Hernande de S. Joseph) が豊後に到着した。

長崎の學林と、深堀 (Foucafori) 古賀 (Conga) 内海 (Ouchime) 及び外海 (Focame) 四箇所の駐在所には、三十四名の耶穌會士がゐて、中二十名は神父であつた。彼等は五島の島々に傳道した。

其學林の一神父は、公方様と其息子に謁せんが爲、關東の首府となつた江戸に遣はされた。京都より江戸に至る立派な街道には、嘆稱すべき古代の遺跡、就中賴朝 (Yoritomo) の都せし鎌倉 (Camacoura) の舊き町があつた。公方様父子は、宣教師を厚遇し、特に若き將軍は、布施といふ名目で銀數枚を賜つた。

江戸附近には、英人アダムスと其同僚たる多數のオランダ人が住んでゐた。宣教師はアダムスその人に面會し、アダムス及び其部下が長崎に往つて、又彼地より己が欲する所に行かん爲に旅行手形 (Passage) を與へんことを司教に代つて申し入れた。實は此等の異教徒が庶民の間に悪い種子を蒔くことを恐れたが爲であつた。併し此宣教師の申入を、アダムスは公方様の領地から去るを許されぬといふことを口實として、拒絕した。神父は、同じく之等不幸な人々を改宗せ

しめんが爲、百方盡力したが、彼等は依然として迷忘を堅く守つてゐた。

有馬は、全國擧げてキリスト教であつた。十三名の神父と同様に同數の神弟が學林と若干の駐在所に住んでゐた。大名ドン・ジヤン有馬殿と其夫人ドーナ・ジュスターは立派な龜鑑であつた。ドン・ジヤンは、其従弟たる大村の大名と共に公方様の前に告訴された。一人は苦もなく身の潔白を證明したので、公方は寧ろ敬意以上のものを拂ふに至つた。

我等の救主は、稀有な事實によつて、キリスト教の信仰を固めた。惡魔にとりつかれた一異教徒は坊主共の質問を受けて次の如く答へた。『予は樟の正體であり精である、人が今此樹を切つたので、予は怒つて此人の中に入つて苦しめようとするのである』と。併し何故御身はサクエモンドノ (Sacouyemondono) (彼はキリスト教大名であつた) の家臣の一人の中に入らなかつたのかと彼にきく者があつた。——私はそれが出來ないので、其譯は、此家臣は皆キリスト教で、私はキリスト教に對しては全く無力であるからであると答へた。

八十五歳の一老人が、神父に相談をかけて幾多の疑念に就いて裁決を求めた。同時に自分は五年來、自らに間断なく注意して來た爲、斷えて罪惡を犯す機會がなかつたといつた。彼の疑の要點といふのは、天主は單に善行に報いるのみならず、もつと善行をしたいといふ望にも報いるもの

か知りたいといふ事にかゝつてゐた。神父は、總ての質疑に答へ、此畏敬すべきキリストンに、イエズス・キリストの受難を絶対に信じるやう勧めた。老人答へて『神父様、

イエズス・キリストの御苦難は、永久に忘れませぬ。私は又イエズス・キリストが私の爲にお忍び下さつた御苦難の廣大なるを思ふて、それを汚す事のありませぬやうに』といつた。間もなく老人は、非常に明らかな救靈豫定の兆をあらはして其餘命を終つた。彼は一生貧しい人々に住居や食糧の餘分を分ち與へ大層の慈善家であつた。

或る幼い女兒が木から落ちて、二十四時間其儘少しも動かなかつた。母は、一生懸命祈つた。とう／＼子供が『母、あれ／＼……』(Fava, are, are)と叫んだ。彼女、唯一人彼女だけが幼いイエズスを腕にせる聖母が部屋に入つて来て、自身の子供と同い年の幼い少女を連れて來たのを見た。此少女は、金色の盆を下に下すと、聖母と少女は部屋を出て行つた。話が淳朴なと、此母の如何にも愛に満てる信心の爲に、人は皆少女がなほつたのは、他のキリストンが其信仰を堅く守るやうに、慈悲の権化たる聖母のなさしめ給ふた奇蹟であると信じるに至つた。

天草の志岐、及び神津浦の駐在所は、五名の神父と二人の神弟に管理されてゐた。寺澤は、迫害するどころではなく、今や寧ろ好意を持つやうになつた。彼は尙ほ幕府にて神父等の事を語るの機を得て、立派に彼等の保證をした。

元の教會堂の傍なる見事な家に住つて居た一支那人は、恐ろしい夢を見て胸騒ぎがし、其家を神父に委託し、宣教師に此會堂を復興して貰ふ事とした。

其他在家 (Arie) 島原 (Chimabara) 西郷 (Saigo) 千々石 (Chigiva) 及びカンザ (Canza) の五箇所の教會は、有馬の學林の所屬であつた。之等の駐在所には、五人の神父と六人の神弟とがゐた。

一神父は、薩摩の大名を訪問して、厚遇を受けた。キリストンは、彼を歓待すること、宛も天から降つて來た天使の如くであつた。

神父は鹿兒島から十三リュー離れたカナベ (Canba)、若しくは河邊 (Cabanabe) に於て聖フランシスコ・ザベリヨの記念品を發見した。聖師は其地の宿主に洗禮を授け、ミゲルと命名したのであつた。聖師は彼に眞の十字架の一小片と二つの念珠、聖水を充した陶製の茶碗を一箇遺して行つたのであつた。聖ザベリヨの教を受けたミゲルは、後になつて十才になる吾が子に洗禮を授けて、同じくミゲルと命名した。其子が今や六十歳以上であつて、父は既に五六年前に死んでゐた。此遺物が種々奇蹟をあらはしたり病氣を直したりして來た。此の二代目のミゲルの姉は、神父ザベリヨから洗禮を受けたのであつたが、尙日向 (Fiounga) に存生して居つた。

大村の修院 (イジン・レクトラール) には、四名の神父と other十七名の耶蘇會士が

ゐた。其一部は傳道に、他は研究に従つてゐた。

肥後にあつて幽囚の身であつた三人の慈悲役が、其獨房の狭いのと不潔なことに苦しんだことは、實に酷いものであつた。日本の牢屋といへば、下層の惡黨ばかりしか入れられないで、身分ある者の罪人は、其罰としては若し自殺を望まないとすれば、知行の沒收か追放か斬首かに處せられるのであつた。

其牢屋たるや狭く且陰氣で、其圍は動物の檻のやうに壁ではなく木の柵としてあつた。第一の圍の外に、第二の圍があつて、これで人が近づかないやうにしてあつた。罪人等は、風雨にさらされ、又近くを通る人々の侮辱の害を受けなければならなかつた。各室とも多數の囚人が雜踏してゐて、横になつて眠るといふ事は不可能であつた。

その性殘忍なる主計殿は、冬中地面に蓆を敷く習慣に反き、夏は戸口を開け、其場を掃除することを禁じたりして、告白者の艱難を更に大きくしてゐた。——彼は囚人の勢力をつきさせようし、殊に、彼等に劍や十字架によつて死ぬるといつたやうな榮ある運命を與へまいと願つてゐた。

囚人等は、天主に苦痛を増すと同時に、天主を愛して健氣に忍べるだけの忍耐力をも増し與へられんことを願つた。彼等は、幸にも隔壁を以て異教徒と別々にされてゐて、天主にたのみ、キリスト等と通信する事が出来た。彼

等は、聖像を所有してゐた。而してミゲルは、自ら手寫した聖者の傳記を書いた數冊の聖教書類を所持してゐた。此三人の告白者が斷えざる默想と、其敬虔なる勤行とは、眞に嘆賞に價するものであつた。朝、彌撒の供物の時刻になると、彼等は、バビロンの獄中にあつて窓を明けはなし、犠牲の地エルサレムの方を向いて、日に三回宛祈禱を捧げたあの豫言者ダニエル (Daniel) に倣ひ、教會堂の方に向いて、しみじみミサ唱歌を聞いてゐた。

他にいろいろ祈禱をした上、更にジャンは、平和と、聖なる教會の結束、及び隆昌の爲に、又ローマの教皇の爲に祈つた。

代理管區長たる神父は、長崎に赴いて、囚徒とキリストを助ける方法に就いて、司教と打合せをした。日本人の神父ルイス (P. Luis) と他一神弟が遣はされ、更に身分あるキリストが二人、同道せんことを願つた。神父ルイスは下船しなかつた。其理由は、キリストが之を許さなかつたからで、彼は僅かに、彼を訪ねて來た八代の人の告白を聞いたのみであつた。

此處から彼は、主計の根據地熊本に行き、例によつて日本的新年を好機として主計を訪問したが、優遇されなかつた。彼は姿を變へて八代の方に引かへし、八代に入つてキリストの告白を聽いたが、囚徒に近づく事は出來なかつた。彼は囚徒から、一通は管區長宛、他の一通は自分宛の

(註七) ^(註七) 上では、慈悲役三人の財産を全部没収してしまつた。其家族の者の生活に必要な物までも一切もち去つた。勢、神父等は此寄邊ない人達を助けなければならなかつた。八代の近くの神津浦の敬虔なるキリストンや又長崎の慈善院の兄弟達からも、其寄邊ない人々に布施を送つてやつた。

同時に、節操高き告白者達は、牢内から自分達を指導者と仰いで服従してゐるキリストンを精神的に助けてゐた。彼等は三人の背教者を立歸らしめ、狂喜と希望とに満ちて刑場に行く死刑囚に洗禮を授けて、天主の和平の中に永遠の生命を得るやう此哀れな生活を變へた。

夥しいキリストンが、もつと自由になりたいといふので亡命したいと思つてゐた。而して若し彼等が亡命しないとしても、それは迫害や殉教を避けてゐるやうに見られたくない爲もあり、後に殘つた者の勇氣をくじかせない爲でもあり、殊に、天主の恩召にかなつて殉教の資格ありとされたやうな場合、殉教の冠をはづさない爲であつた。

六七歳の子供等が、唯殉教の事ばかりいつてゐた。其兩親は、子供をさういふ風に教育し、始終、やがて磔刑か、鎗でつかれるか、斬首されるお鉢が廻つて來るといふことや、其首は棚の上に釘づけにされるだらうといふ事を聞かして居つた。

ジョアキムは、重病に懸つた。有馬の修院長は一神父を遣はしたが、彼は百姓に扮装して其側まで入り込む事が出来た。神父が、眠りからおこすと、ジョアキムは其時まで全く人事不省に陥つてゐたのが、完全に意識を回復した。神父は、三人の囚人並に、八代、宇土、熊本のキリストン多勢の告白を聽いた。

此際、暗愚にして迷信家なる毛利殿は、坊主や己が恐怖に制せられ、又もベルシオール・熊谷豊前殿 (Belchior Coumagaye Bougendono) を襲ひ、遂に彼を殉教者たらしめた。此顯著たる人物は、人々のいふが如くんば、名將の後であり、又自らも偉大なる武人であつて、安藝の國三入 (Miri) の城主であつた。彼は十八年來、キリストンとして、同國人を多數改宗させ、己が領内に一箇の教會堂を建立した。

久しい以前から彼は、身を曝す恐れのある絶え間なき戦争は、死んでも終らないであらうといふことばかり思ひわづらつて居つた。かくて彼は、熱心に覺悟を決め、日々戒行に怠りなかつた。毛利殿は、主要の市なる萩 (Fanghi) に城普請をしたが、此事からベルシオールの聲、天野五郎左衛門 (Anan Goroyemon) と益田玄蕃 (ara 益田玄蕃元祥) といふ偶像信者の大名二人の間に葛藤が起つた。ベルシオールは、雙方の間を調停して、世の賞讃を博した。併し、此感情の行違のあつた間は、工事が中絶して居つた。そこでベ

ルシオールは、兩士官に代つて築城のことと當るやう命令を受けたが、此時別に從ふべき當然の理由があつて、之をことはつた。

聖母昇天祭の日、毛利殿は千人の兵を遣はしてベルシオールの家を圍ましめた。二人の主なる士官ヤナギサハ・サンザエモン(○Yanagisawa Sanzayē)と坊主ミヨーゴンジヨ(Meogonjō)家に入つて、人質を出すべきことを領主の名に於てベルシオールに告げた。彼等は死刑の宣告に關したことは何も言はなかつた。其理由は彼等が一切の抵抗を豫防せんが爲であつた。

實際、死に處せらるべき者が、抵抗するとか逃走するとかした場合には、其人質が殺される、又抵抗と逃走もしない場合には人質の生命は、重んぜられるといふのが日本の習慣であった。ベルシオールは、其末子フランシスコ・イノスケ(○François Inosuke 假托)及び其孫マヌエル・ヨサムブロ(○Manvēl Yosamouro 假托 マヌエル・與三郎)を渡した。後者は毛利殿と縁ある者であつた。

ベルシオールは、之等の人質を出すと、毛利殿の前に出て、其處で信仰を告白すべき時のある事を期待してゐた。然るに其家は依然として圍まれてゐた。之を見るとベルシオールは、最後の瞬間の切迫して來たことを知り、死の準備に一夜を明した。彼は初め抵抗しようかと考へ、長刀で

もつて身を堅めた。併し彼は神慮を畏んでそれを斷念した。^(註八)

八月十六日(○七月二日)^(註九)の朝、二人の士官は兵卒を率ゐて入つて來た。ベルシオールは、片手に念珠を執り、他の手に繩を持つて捕縛を待つた。士官等は、毛利殿が彼を死刑にする理由として二箇條の罪状を擧げた。此罪状とは、聟の争に加はつたといふことと、度々發した禁令を顧ずしてキリシタンになつたといふことであつた。彼は切腹を命ぜられた。ベルシオールは、甘んじて死に處せられる事を承知したが、自殺することだけは断つた。

彼は両手に持つてゐた繩を二人の使者に差出し、堅く縛つて毛利殿の許に連れ行き、其面前で耻辱を加へて死刑に處せられんことを請うた。併し彼等は、それをきかなかつた。ベルシオールは奥に退き、彼の一番の晴衣を着けて、座敷に引返して來た。彼は小さき聖像の前に跪いて、暫時祈禱をなし、次いで頸を劍手の前にさしのべた。其首を刎ねたのは、シーモ(Chichimō 実)といふ兵士であつた。人々は此戰捷記念(○首級)を毛利殿の許に持つて行つた。毛利殿は、血縁ある幼い人質を除いてベルシオールの夫人、子、孫並に重臣等を死刑に處し、遺骸は悉く焼いて灰にせよと命じた。又キリシタンたりしベルシオールの聲も、其宣告の中にあつて、かくて百人以上の犠牲者を數うるに至

つた。此聲について注意すべきは、日本に在つては喧嘩した爲に領主が死を命ずる時は、雙方共に死すべきではあるが、此度は相手方の助けられたことである。

ベルシオールは五十歳であつた。

ベルシオールの死後、キリストンは直ちにダミヤン(Damien)の死を心配した。ダミヤンとは、即ち琵琶(ハイオール)を彈じ、古の物語を語つて人の布施を得て暮してゐた一人の盲人のことであつた。彼は、もと堺(Sacci)の生れで、二十五歳の折山口で洗禮を受けたのであつた。彼には妻があつた。ダミヤンは資性甚だ活潑なる精神に恵まれ、又大度あり、尙神聖なる洗禮の惠によつて其天才を伸ばし、僅の間に驚く可き精神に關する事どもを會得した程であつた。彼は、もと山口の神父の助手をして居つたのであつたが、神父の去つた後は、其代りをつとめてゐた。かくて彼は新に生れたる子には洗禮を授け、無學な者に問答をし、死者を埋葬し、尙惡魔にとりつかれたる者の體から惡魔拂をした。若し威厳に於てベルシオールを筆頭とすれば、ダミヤンは教理に於て第一位であつた。耶蘇會では、ダミヤンをして専心聖務に従はせんが爲に、一身を支へるに足る知行を與へ、又彼の爲に小やかな家を建て、其妻女と共にこれに住み、祈禱所となさしめた。

ベルシオールの死後四日目に、毛利殿は其首府萩より二人の士官、即ち奉行(Boungiōs)を遣はして被刑者の財

産を差押へさせた。二人の奉行はダミヤンを召喚した。之は八月十九日(○七月五日)のことであつた。ダミヤンは召喚の目的を察知して身を棄てる前に死ぬ準備をした。彼は身を清め、一番立派な衣服を纏ひ、二人の善良なキリストンに伴はれて出て行つた。奉行は彼と議論したが、彼は驚くべき雄辯を以て答辯した。奉行は何の得る所なきを見て死刑にしようと決心した。併し彼等は、キリストンを憚つて公然と之を行ふことを欲しなかつた。人々は靜かにベルシオール(○恐らくダミヤンの誤ならん)の伴侣を歸らしめ、夜半彼を馬に乗せた。諸人は松明の光によつて罪人を死刑に處する場所たる一本松(Ippon Matsou)といふ山口の刑場に行つた。ダミヤンは馬から下りて暫しの間祈禱をし、次いで劔手の前に頸をのべた。其遺骸は千々に切りきざまれ、其一部は川に一部は附近の森の中に投げ捨てられた。劔手が取りのこした首級と左腕とは、キリストンによつて拾ひ集められた。此殉教者は、四十五歳であつた。

廣島の宣教師は、山口の信者を救ひに來たいと思つてゐた。山口の信者は宣教師が來ないやうに願つた。それは火に油を注ぐやうなものであつたからであつた。熱心なキリストンが其代りとして遣はされた。

此際、毛利殿は信者達の決心を見て、彼等が暴動を起したり國を立ち退いたりしないやうに、其儘放任して置いた。最初彼は宣教師を追放し、キリストンの中心人物二人

を殺してしまへば、教會は自ら衰頹するものと思つて居た。

然るにキリストは愈々おだやかになると、宣教師を呼んで同志の中で祕かに隠まつておくこととした。

併し乍ら毛利殿に神罰があつた。人民が皆彼を去り、ペルシオールの死刑にせられたことに憤慨した其重臣數名は辭職した。彼が領國の總奉行サシエンドノ（O Schedendo）（○佐瀬殿）は、堺に隠退した。絶望の淵に沈み、迷信におどおどしてゐた毛利殿は、キリストの教を奉ずる上役の士を悉く、其郷里に返し、城内に彼等が占めてゐた部屋を坊主と妻に呈供し、かくて此坊主共を通じて偶像に對し、斷えず供物を捧げたり愚劣な祈禱をした。

廣島には神父、神弟、問答説教師各一名宛ゐた。安藝及び備後の領主福島殿は非常に好意を寄せてゐた。彼はサコンドノ（Sachondono）の舊屋形を彼の神父に與へ大へんな喜捨、即ち銀約二十枚（即ち金百エクス）と蠟燭二百丁を寄進した。彼は尙十七歳になる子をつれて一時間に及ぶ説教を聽きに來た。ところ此若者は、若しも父が許すなら、キリストにならうといひ出した。

併し其土地の商人等は、敗徳の徒で改宗には適しない輩であつた。之れ正しく地獄の猶太教徒であつた。坊主共は、君侯の面前で神父等を誹謗しようとしたが何等成功しなかつた。彼等は、宣教師は人肉を食ふといふことを信じさせようとして夜中、宣教師の門口に死體を投げ出してお

いた。

筑前守を名のつた甲斐守は、博多の城主で、筑前總體の領主であつた。彼は未だ信者にはならなかつたけれども、其父シメオンの死後も依然として好意を寄せて居つた。大脣賑かにして下（○九）（州）中での要市たる博多に改宗する者が出来始めた。同地には、一名の神父と二名の神弟がゐた。甲斐守は父の遺命に従つて美麗なる會堂を建立した。父は其處に埋葬されることを望んでゐたのであつた。

或朝鮮人のキリストは、其同胞を開發する爲に兩國に共通なる言語即ち支那語（○漢）の問答書を郷國に持つて歸つた。

此頃、夥しい支那語や日本語で書かれた聖教書類が存してゐた。最後に念珠の玄義に關する一書も近く翻譯された。

領主の父方の叔父シモン黒田の領分秋月では、一宣教師を得た。同神父は、筑後をも訪問した。同地のキリストは相當多數あつたが、ちりぢりになつてゐた。併し久留米や同國の要市柳河には素晴らしい信者の團體があつた。領主タナカ・ヒヤウブンドノ（○ Tanaka Fioboundono）は好意を寄せ、會堂用の土地を寄進した。諸大名は殆んど皆進んで説教を聽きに來るのであつた。

豊前の小倉には、一名の神父と二名の神弟がゐた。大名長岡越中殿は、若し第六戒がなかつたならば、キリスト

になつたであらう。十九歳になる其子内記殿（Naichidono細川越中守忠利^(註一)）は、可成好意をもつてゐた。^(註二) 豊後のフランシスコの孫にしてチカトリ（Chicatori^(註三)）の子なる十八歳の若者は大層美しい死を遂げた。

豊後には、二名の神父と一名の神弟、それに若干名の問答師が居つた。彼等は二つの廣大なる會堂を建てた。^(註四)

此年舊の豊後の大名にして、既に棄教して謫地にあつたドン・コンスタンチン義統（D. Constantin Yochimoune）が死んだ。彼が嘆賞すべき改宗に就ては既に述べた。爾來彼は忍耐謹嚴の生活をした。最初彼は京都に追放せられ、その領地を回復せんことを欲して、投獄せられたが、やがて釋放され、終に出羽（Dewa）の秋田（Akita）に謫せられて、同國の領主（○佐竹^(註五)）にお預けとなつた。出羽の領主が移封にあふや、彼も亦彼に伴ふこととなり、甚しい悲慘に陥ることゝなつた。彼は自分は何人にも増したる罪人である、されば、並ならぬ痛悔を行はねばならぬといつて愈々祈禱と苦行とに勵んだ。遂に彼は熱病に罹り、次第に衰弱した。彼は既に妻子なく、たゞ三人の家臣があるのみであつた。彼は神父やキリスト教徒の淨財を受けて其日其日をおくつてゐた。終に謫居五年の後、此悔悟せる罪人の慈悲によつて召喚を受け、婆婆を棄てゝ永生に入つた。

内裏（Dairi）の御身近く仕へて居た甚だ著名なる公家龜鑑ともいふべき彼は、祕蹟によつて信仰を堅め、天主が慈悲によつて召喚を受け、婆婆を棄てゝ永生に入つた。

（Coungher）の女にして、豊後のドン・フランシスコの孫に當るマキゼンスも、亦此年死んだ。彼女は、其叔父が封を奪はれた時、七八歳であつたが、祖母に引取られて、長崎に行き、其處で十二歳まで育てられた。當時、彼女は貞潔の誓をたてんと欲した。彼女は祖母と聽悔師の許しを得た。彼女は此誓をなし、難行苦行に身を委ねた。聖降誕祭の時は、聖子イニズスに倣つて乾草の上に寝た。十八歳の時餘りにも過度の苦行の爲病にかかり、八十日間、大儀な床に呻吟した。彼女は、我主に熱心に、死期に當つて、嘗てかういふ際に如何なる人も経験しなかつたやうな非常な苦痛を嘗めさせられんことを望む、其故は妾は救世主の神聖なる後受難と死とを崇めんが爲に最大の苦痛を望むが爲であるといつた。彼女の例に倣つて貞潔の誓をたてたる若い娘が澤山あつた。

アウガスチンの女にして對馬（Tsushima）の大名と離別したマリアは、寡婦の龜鑑であつた。彼女は長崎に退いて髪を切つた。尙彼女は、既に貞潔の誓を立てて居つた。彼女は長々患つた後で聖心を抱いたまゝ死んだ。

京都地方では上下兩京、伏見、大阪及び北國（Fuccou）の五箇所の傳道所に七名の神父と十名の神弟が居つた。帝國中屈指の地たる之等の地方は又迷信と諸宗派の中心でもあつた。改宗する者は稀であつたが、往來の者のさし引きは傍聴人の心を引き、中にはイエズス・キリストの網にかゝ

る者もあつた。^(註一四) 坊主共は宣教師の悪口をいつたが、貴族の心はすつと傾いてゐた。公方様はどうかといへば、彼は好意は持つてゐなかつたが、さうかといつて當時は、左程敵意を持つてゐるのでなかつた。されば坊主共の告訴も彼をして宗教に敵對行爲に出でさせるといふことはなかつた。

彼は大大名といふのでなければ、キリスト教徒になつたところで別に異議を挿まなかつた。彼は神父の訪問する者あれば之を厚遇し、其學識は坊主のそれに勝ると見て居つた。大大名等も公方様に倣ひ、京都に上ると神父等を訪問し、中には教義を聽く者もあり、又科學殊に數學や天文の事を談じ、坊主共の無智を笑ふ者もあつた。彼等は遊星の運行を説明するやうに出來た機械を示されて、科學的の證明に感服し、結局、數學上の事天文の事にかくも詳しい神父等なれば、^(註一五) 神の事、救濟にまつはる事も亦信ずるに足らうと推定した。

内裏も亦地球儀に興味を覚え給ひ、出入の職人がこの地球儀の製作に着手するやうに望まれた。

大名の中には、京都の所司代板倉殿（○ Itacomand ^{グアルタル} _{ono 板倉勝重}）や公方の有力な味方にして帝國內に非常な勢力のあつた上野殿（Conzouyedono ^{本多上野介正純}）があつた。——上野殿は、眞に天主と靈魂

は存在する、從つて此靈魂の救濟は存在すると公言して居つた。

京都の新會堂は最近竣工した。多數のキリスト教徒は

身自ら來つて奉仕したのであつた。次いで降誕祭の日に聖なるミサが唱へられた。

神父スピノラは此年、京都に遣はされて、同地方の世話人即ち會計係となることになつた。

聖母の組合が、嘗て九州の方面に出來たと同じやうに、京都に設立された。又諸人は耶蘇會の傳道所の中に、問答師等の爲に御告の組合を創つた。會員中多くは、異教徒が流して行つてくれるやうにと川端に棄てゝ行つた子供を集めの仕事にかゝつた。之等哀れな子供の中或は息も斷え断えのものもあり、さういふ場合には、之に洗禮を授けると、やがて其靈魂は直に天に上つて行つた。

太閤様の未亡人政所様の甥にして先年洗禮を受けた若い大名は猛烈な迫害を試みた。彼は父並に叔母の不興を買ひ父祖の家を立退くの已むなきに至り、夫人と家來若干名を引き具して、教會堂の側に來つて住んだ。彼は斷えず信心の勤行及び戒行に精勵して居つた。それが手本となつて其夫人を始めとして、家族の大部分が改宗した。天主は、彼の父が暫く後に至つて、試練によつて清められゝば愈々益益信仰を堅く守るに至つた彼を寵愛し、元の如く遇する事を許し給ふた。

關東の或婦人は、其兄弟の勧めに依り夫に其譯を言はずして京都に來り、教義を聽いてキリスト教になつた。歸つて來て改宗した由を夫に告げた。ところ夫は彼女を離婚す

る事を希んだ。彼女は言譯せず、衣類の用意をさせて直ぐ様出發の用意にかゝつた。夫が思ひ止まるやう望んだが、彼女は自分も自由の身となり夫の許可を得た身である、偶像信者を夫に持つ位なら、夫のない方がいゝと言つた。夫は説教を聽聞する約束をした。彼女は、夫をキリストianにする事が出來さうだといふことに希望をかけて、此約束に満足し、爾來、其振舞は全く女天下で、其家來達が眞の教を抱くやうにする準備として、教會の祭式ある毎に之を見させるといつた具合であつた。

キリストianなる娘は、死期も漸く近づいた事を感じて、祭壇の下で息を引とりたいから教會に連れて行つて貰ひたといつた。如何にも、彼女は祭壇の下に移されると、告白し絶息した。

丹波 (Tamba) の國では、キリストianの熱心は非常なもので、其數も増加しつゝあつた。彼等は數々の迫害に耐え、盛名を馳せた。

伏見には一名の神父と二名の神弟(註一)が居つた。フィヂモンコ (Fidgimono) と稱する新宗派の長たる一坊主は、公方様の子にして越前 (Yetschigen) の大名三河守 (三河守秀康) の重臣の一人の若者と共に洗禮を受けた。伏見のキリストianの中でも、最も熱心な者の一人はサンダ (佐渡のことならん) の國に行き、其處の鑛山に使はれてゐるキリストianの心を引きたゞせ、此小さな移民地の意氣を新にした。

公方様の側近く仕えてゐる婦人の中に、元ドン・アウガスタンの夫人の侍女をしてゐた朝鮮人が一人あつた。此婦人は、宗教に對して異常に熱心であつた。彼女は、晝は御殿で仕事があり、いつも異教徒が居る爲に暇をとることが出来ぬ爲、夜は多く聖教書を讀むこと、祈禱をして明した。未だ改宗してゐない朋輩を改宗させて教理の眞なることを知らせたいといふのが彼女の第一の願ひであつた。併し更に最も驚嘆すべき事は、美人で天性秀れて圓滿、其上年頃なるに、彼女は宛も棘の中にある薔薇の如く浮薄な御殿の中に在つて己をよく守つてゐた事は驚く可きものであつた。其理由は、いつて見れば彼女は其キリストianとしての徳の香氣が發散してゐたからであつた。

大阪には、一名の神父と二名の神弟(註二)が居つた。大阪は伏見に來る諸大名が上陸の場所であつた。市中一番の寺は、天王寺 (Tenmoji) といふ日本に於ける主なる宗派の源であつた。四千回以上の説教をして來た一坊主が改宗した。

北國即ち北の地方の中加賀 (Canga) 能登 (Noto) 越中 (Yetschou) の三箇國は、肥前殿に屬して居つたのであるが、肥前殿は宗教には非常に好意を寄せ、加賀の首府カマガワ (Camagawa) に居つた。越前は、公方様の子三河守の領地にして、丹波には一キリストian大名が居つた。

神父一名と神弟一名とが此年金澤に行つて逗留した。右近殿 (○高山) は、最近其處に美麗な會堂と教會を建て、必

要なだけの收入の道をつけておいた。神弟は大名を訪問したが、此大名は大層好意を持ち其重臣の一人を遣はして宣教師を訪問させた。此大名は間もなく越前の國に行つて隠居した。彼は加賀の城を公方様の孫娘を娶つた弟(○前田利常)に譲つた。内府様が死んだ暁は肥前殿が其後を受けて天下の政をとることもあらうと人々は信じて居つた。

金澤(Canazawa)の神父は、屢々能登のキリストンを慰問した。此教徒の大部分は舊の右近殿の家來並に越前の舊の家來であつた。之等のキリストンは優秀であつた。

耶穌會では、此年、神父コツタ(P. Cotta)の外に、舊時から働いて來た人々の中二人を失つた。中一人は、マセラタ(Macerata)生れの父ジウリウ・ピアノ(P. Giulio Piano)にして六十八歳で九月二十五日(○八月十日)に逝去したのであるが、宗教生活を送ること四十一年、日本滞在二十七年であり、他の一人は神父バルタザール・ロペス(P. Baltazar Lopez)や、ヴィラビシオーザ(Villavicosa)生れのポルトガル人、十二月三日(○十月三十日)七十歳にして逝き、宗教生活を送ること四十四年、其中三十七年を日本で過した。

此年、オランダの提督ファン・スルブルゲン(Van Spilbergen)が、セイロン島(Ceylan)を訪問した。彼が回廊せり更にシヤム及び印度の諸方に行つた。彼等はポルトガルよ

リテルナーテ島(Ternate)及びティードール島(Tidor)を奪つた。ところニスペニヤ人が又之をオランダ人から奪ひかへした。併し之等種々の成功は大いなる力の根源となる事になつた。オランダ人は土着の諸侯の助けを得てマラッカを攻撃し、一萬五千の兵を乗せた此國の船百五十艘よりなる大艦隊を組織した。要塞は、薄弱な屯衛兵隊をもつてアンドレ・ウルタード・ド・メンドーサ(André Hurtado de Mendoca)が防禦してゐたのであるが、屯衛部隊の中には若干の日本人も交つてゐた。四箇月後ニスペニヤ人の援軍が到着すると、彼等は圍を解いた。

三月二十日(○二月二十一日)オランダの東印度商會(la Campagnie hollandaise des Indes orientales)が創立されたのであるが、それがオランダ貿易に莫大な擴張をもたらすに至つた。

(註1) Gio. Bod. Giram. Littera annua dell'anno 1605

(Imprimée avec celles de 1603 et 4). Roma, 1608, 8°. Rel

azione della morte c' hanno patita . . . Damiano Cieco, e Melchior Bugendomo, etc. (écrite par l'évêque-insérée dans la précédente). Relatione della gloriosa morte di IX christiani Giaponesi, etc. Roma, 1611. 8° (pour les Jifaques Guerreiro. Relagam de 606 e 667 (faits de 1605). Lisboa, 1609, 4°.

Aduarte. T. I, l. 1c. 62. Santa Maria. Chronica de S. Joseph.

Sicardo. L. I. C. VIII. Juan de la Concepcion. T. IV.

(註1) 慶長十年 (Annales des Dairis)

(註川) 頼朝は我が一一七九年より一一九九年に亘る間帝國を

治めて居つた。

(註四) 彼はリュック (Lucques) に生れ、享年三十二歳であつた。彼は耶蘇會士となつてより十年、日本滞留一年、あつた。彼と一緒にゐた神父二名と神弟一名は難船を逃れた。

(註五) 一六〇五年、フィリップのディラオ (Diao) に根據を占め、其數凡そ五萬に及べる日本人はエスパニヤ人との間に意見の衝突があつた。一日日本人が殺されるや、其朋輩は武器をとり、陣を築いて、立籠つた。日本語を話せる宣教師等は來つて双方を宥め大事を豫防した。

(註六) 此親書は教皇パウロ五世の命令により、ローマ教皇特派公使 (Le Nounce) 権機官モリノ (Molino) がマドリッドの傳道所に通告した。

(註七) 附錄十一及び十一ノ乙

(註八) ○ verdadeiro esforço estava em se mostar soldado de Christo, recebendo por elle a morte com muita paciencia, Como elle podendo anhilhar seus inimigos a recebeo por nos (Guerreiro)

(註九) キリストンが最初の中、切腹しないといふ無限の屈辱を感じれば感じる程、彼の行動は驚嘆すべきものであつた。

其後彼は謙讓に此歴然たる不名誉を蒙つて、跪づき從順な犠牲となつて致命傷を受ける事を自ら幸福とした。

(註一〇) 此に語らうとするベルシオール及びダミヤンの物語は司教によつて認められた年報の中にある。

(註一一) 調査は長崎に於て司教並に司教より委託された廣島の神父の前で行はれた。

(註一一) 豊前には新に六百人の受禮者があつた。

(註一三) 八百名の受洗者があつた。

(註一四) 此年成年受洗者は三百七十八名あつた。

(註一五) Inferem bem daqui, que poys os Padres nestas naus Ihe fallam tanta verdade, descobrindo-lhe O que ate agora nao sabiam nem entendiam: nam poderam deixar de tambem Ihe falhar, no que the pregam de Deos e da solvagam. (Guerreiro)

(註一六) 伏見にも京都にある位六百名の受洗者があり、なほ新會堂が伏見に建立された。

(註一七) 大阪には二百六十人の受洗者があつた。